

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小林 大介（臨床心理研究コース）

■ 研究題目
迷惑な接近行動による恐怖感の背景要因の検討 —被害者が認知する元交際相手のパーソナリティと接近の意図に着目して—
■ 研究代表者・分担者 氏名
小林 大介（臨床心理研究コース）（代表者） 大泉 珠希（臨床心理学コース） 高橋 菜央（臨床心理学コース）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
<p style="text-align: center;">問題と目的</p> <p>ストーキングは、被害者に対して多様かつ深刻な影響を与える社会問題である。しかし、本邦におけるストーキング被害者を対象とした研究は非常に少ない。また、数少ないストーキング被害者研究を見ても、加害者との関係性が限定されておらず、測定しているストーキング被害が不明瞭であったり、ストーキング被害による影響が測定されていないというような課題が見られる（小林, 2018; 城間・松井・島田, 2017）。そこで、本研究では、被害件数が最も多く、被害による深刻さも最も高い元交際相手という関係性（警視庁, 2020; Logan, 2020）に焦点を当て、ストーキングを含めた迷惑な接近行動の被害（Langhinrichsen-Rohling, Palarea, Cohen & Rohling, 2000）を測定し、加えて、迷惑な接近により生じる恐怖を含めた苦悩感情を測定することでこれらの課題の解消を試みる。そして、ストーキング被害により生じる苦悩感情に影響を与える背景要因の検討を行う。</p> <p>これまで、ストーキングによる心理的な苦痛は、性別、被害の深刻度の認知、加害者との関係性、婚姻状況（Dietz & Martin, 2007; Reyns & Englebrecht, 2013）のようなデモグラフィックな変数や、被害の持続期間、（Johnson & Kercher, 2009）、加害者からの接触頻度（Sheridan & Roberts, 2011; Thompson & Dennison, 2008）、被害内容の多様さ（Johnson & Kercher, 2009; Thompson & Dennison, 2008）、のようなストーキング被害の内容や頻度の側面から検討が行われてきた。しかし、被害者によるストーキング加害者に対する認知については未だに触れられていない。Kamphuis, Emmelkamp & de Vries（2004）や、Spitzberg & Veksler（2007）による調査では、ストーキングの被害者は加</p>

害者を、「不安が高く、協調性が低い、気分や感情の不安定さを特徴とした人物」と評価していることが示されており、被害者が加害者を「危険な人物」と判断している様子が伺える。このような側面を踏まえ、被害者は、ストーキング被害の内容や頻度だけでなく、加害者そのものに対して、恐怖感を感じていると考えられる。

以上の点を踏まえ、本研究では、ストーキング被害者が認知する加害者が、ストーキング被害により生じる苦悩感情に与える影響を検討することを目的とする。そこで、まず、研究Ⅰでは、ストーキング被害者が認知する加害者のパーソナリティが、ストーキング被害により生じる苦悩感情に与える影響について検討する。そして、研究Ⅱでは、ストーキング被害者が認知する加害者の接近の意図が、ストーキング被害により生じる苦悩感情に与える影響について検討する。

なお、本研究の研究Ⅰ、研究Ⅱは、東北大学大学院教育学研究科倫理委員会より実施の承認を得ている（承認ID：20-1-020）。

研究Ⅰ 方法

回答者と実施方法

過去5年間に元交際相手との別れを経験した18歳から39歳の一般人を対象としたWeb調査を実施した。調査対象者の募集は、クラウドソーシング事業者である株式会社クラウドワークスを通じてWeb上で行い、男性73名、女性134名の計207名（平均年齢29.57、 $SD=5.81$ ）を最終的な分析対象者とした。

調査内容

フェイスシート 年齢、性別、恋愛関係を解消した後に迷惑な接近を行ってきた元交際相手の有無について回答を求めた。

元交際相手からの迷惑な接近被害の測定 小林（2020）が作成した日本語版改訂被害者用迷惑な接近行動尺度（以下、UPBI-R-V-Jとする）17項目を用いた。

元交際相手からの接近により生じる苦悩感情の測定 大迫・高橋（1994）が作成した対人感情尺度の「苦悩」を測定する7項目の中から、二重負荷が見られた「後悔」を除いた6項目を採用した。

接近時の元交際相手の感情・欲求コントロールの測定 原田・吉澤・吉田（2008）が作成した社会的自己制御尺度の「感情・欲求抑制」を測定する9項目を使用した。

接近時の元交際相手のパーソナリティの測定 内田（2002）が作成したBig Five Scale 短縮版20項目を全て使用した。

研究Ⅰ 結果

各変数の記述統計および相関関係

まず、各変数の記述統計および、男女別の相関係数を算出した（Table1-1）。

Table1-1 各変数の平均値と標準偏差ならびに
各変数間の男女別の相関関係

	α	Mean	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 迷惑な接近被害	.81	0.61	0.36		.51***	-.32**	-.08	.33**	-.17	-.07	-.12
2. 接近による苦惱感情	.89	3.70	0.86	.43***		-.26*	-.10	.37**	-.05	.11	-.09
3. 感情・欲求抑制	.82	2.72	0.68	-.36***	-.34***		.59**	-.33**	.25*	.11	-.01
4. 協調性	.91	3.69	1.26	-.27**	-.29**	.63***		.05	.27*	.43***	.22
5. 情緒不安定性	.90	4.31	1.35	.20*	.33**	-.25**	-.03		-.14	.31**	.01
6. 勤勉性	.82	3.95	1.26	-.08	-.08	.37***	.30**	-.04		.24*	-.16
7. 経験への開放性	.72	3.76	1.10	-.02	-.06	.19*	.24**	.11	.16		.22
8. 外向性	.81	4.52	1.18	-.03	-.14	-.08	.13	-.18*	-.03	.31***	

注) 男性: $n=73$ 女性: $n=134$ なお, 右上部が男性, 左下部が女性である。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

被害者による加害者のパーソナリティ認知が苦惱感情に与える影響

続いて, 男女ごとに, 相関関係の検討の際, 相関が確認された変数をそれぞれ説明変数, 接近による苦惱感情を目的変数とする重回帰分析を実施した(Table1-2)。男性では, 迷惑な接近被害 ($\beta=.44, p<.001$) と, 情緒不安定性 ($\beta=.22, p<.05$) から有意な正の標準回帰係数が示された。女性では, 迷惑な接近被害 ($\beta=.33, p<.001$) と情緒不安定性 ($\beta=.25, p<.01$) から有意な正の標準回帰係数が示され, 協調性 ($\beta=-.19, p<.05$) から有意な負の標準回帰係数が示された。

Table1-2 接近による苦惱感情に対する重回帰分析結果

	独立変数	従属変数			
		接近による苦惱感情			
		β	R^2	調整済み R^2	ΔR^2
男性 ($n=73$)	迷惑な接近被害	.44***			
	情緒不安定性	.22*	.30***	.29	.04*
女性 ($n=134$)	迷惑な接近被害	.33***			
	情緒不安定性	.25**			.06**
	協調性	-.19*	.28***	.27	.03*

投入方法: ステップワイズ法

注) ΔR^2 値は各変数を加えたときのモデルの R^2 値の変化量を示している。 β 値と R^2 値, 調整済み R^2 値は最終的なモデルの値のみ示した。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

研究Ⅱ 方法

回答者と実施方法

研究Ⅰと同様の手続きで Web 調査を実施し、男性 111 名、女性 249 名の計 360 名（平均年齢 30.14, $SD=5.43$ ）を最終的な分析対象者とした。

調査内容

フェイスシート 年齢、性別、恋愛関係を解消した後に迷惑な接近を行ってきた元交際相手の有無について回答を求めた。

元交際相手からの迷惑な接近被害の測定 小林（2020）が作成した UPBI-R-V-J17 項目を用いた。

元交際相手からの接近により生じる苦悩感情の測定 大迫・高橋（1994）が作成した対人感情尺度の「苦悩」を測定する 7 項目の中から、二重負荷が見られた「後悔」を除いた 6 項目を採用した。

接近時の元交際相手の接近目標の推測 Ohbuchi & Tedeschi（1997）が作成した葛藤解決における目標尺度（日本語版は大淵・福島（1997）に記載）の社会的目標 12 項目の内容を、原著者の許可のもと、他者評定用に修正したものを使用した。

接近時の元交際相手の自分に対する感情の推測 斎藤（1985）が作成した他者に対して感じる情緒 23 項目を使用した。

研究Ⅱ 結果

各変数の記述統計および相関関係

まず、各変数の記述統計および、男女別の相関係数を算出した（Table2-1）。

Table2-1 各変数の平均値と標準偏差ならびに各変数間の男女別の相関関係

	α	Mean	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 迷惑な接近被害	.84	0.67	0.39		.47***	.07	.20*	.01	.13	.21*	.29**
2. 接近による苦悩感情	.85	3.87	0.74	.39***		.26**	.26**	.13	.34***	.32***	.14
3. 関係目標	.85	3.87	1.33	.04	.32***		.27**	.49***	.32**	.00	.34***
4. パワー・敵意目標	.89	2.15	1.56	.26***	.31***	.05		.40***	.63***	.58***	.11
5. 公正目標	.80	3.10	1.63	.16*	.19**	.40***	.40***		.49***	.25**	.06
6. 同一性目標	.84	3.07	1.78	.20**	.30***	.26***	.56***	.50***		.31**	.09
7. 憎悪嫌悪感情	.89	2.60	0.77	.35***	.23***	-.04	.49***	.31***	.29***		.01
8. 好意愛情感情	.78	3.42	0.76	.11 [†]	.20**	.41***	.04	.36***	.24***	.03	

注) 男性: $n=111$ 女性: $n=249$ なお、右上部が男性、左下部が女性
 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .1$

被害者による加害者の接近意図の推測が苦悩感情に与える影響

続いて、男女ごとに、相関関係の検討の際、相関が確認された変数をそれぞれ説明変数、接近による苦悩感情を目的変数とする重回帰分析を実施した (Table2-2)。男性では、迷惑な接近被害 ($\beta = .43, p < .001$) と、同一性目標 ($\beta = .28, p < .01$) から有意な正の標準回帰係数が示された。女性では、迷惑な接近被害 ($\beta = .32, p < .001$)、と関係目標 ($\beta = .30, p < .001$)、パワー・敵意目標 ($\beta = .21, p < .001$) から有意な正の標準回帰係数が示された。

Table2-2 接近による苦悩感情に対する重回帰分析結果

	独立変数	従属変数		R^2	調整済み R^2	ΔR^2
		接近による苦悩感情				
		β				
男性 ($n=111$)	迷惑な接近被害	.43***				
	同一性目標	.28**	.30***	.29	.08**	
女性 ($n=249$)	迷惑な接近被害	.32***				
	関係目標	.30***			.09***	
	パワー・敵意目標	.21***	.29***	.28	.03***	

投入方法：ステップワイズ法

注) ΔR^2 値は各変数を加えたときのモデルの R^2 値の変化量を示している。 β 値と R^2 値、調整済み R^2 値は最終的なモデルの値のみ示した。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

総合考察

研究 I、研究 II の結果より、元交際相手からの接近により生じる苦悩感情に対しては、被害者による加害者の認知が影響していることが明らかとなった。まず、研究 I では、加害者のパーソナリティの認知の面から検討を行った。その結果、男女に共通する特徴として、迷惑な接近被害の経験に加え、加害者の情緒不安定性の認知が迷惑な接近により生じる苦悩感情に影響を与えることが明らかとなった。また、女性においては、加害者の協調性の認知も迷惑な接近により生じる苦悩感情に影響を与えることが明らかとなった。

研究 II では、男性においては、迷惑な接近被害の経験と、加害者の同一性目標の認知が苦悩感情に正の影響を与えることが明らかとなった。同一性目標とは、加害者が自身の社会的体面や評判、あるいは自尊心を守ろうとする目標である。この点を考えると、男性においては、接近してくる加害者の意図として、自己保身のようなものを認知した際に苦悩感情を感じると考えられる。女性においては、迷惑な接近被害の経験に加え、関係目標とパワー・敵意目標の両方が正の影響を与えていた。関係目標は、相手との間に良い関係を維持しようとする目標であり、パワー・敵意目標は相手を支配したり、罰しようとする目標である。興味深い点としては、パワー・敵意目標だけでなく、比較的ポジティブな意味を持つ関係目標も苦悩感情に正の影響を与えていたことである。女性においては、たとえ

交際関係解消後に行われる元交際相手からの接近が、良い関係を築きたいという目的を持っていると認知したとしても苦悩を感じることを示唆された。

以上の結果から、本研究では、元交際相手からの接近により生じる苦悩感情に対して、被害者による加害者の認知が影響していることが明らかとなった。今後は、研究Ⅰ、研究Ⅱで示された結果をもとに、加害者のパーソナリティの認知と接近の意図の推測の相互の関係性を明らかにし、加害者認知がストーキング被害の苦悩を増大させるモデルを作成する必要があるだろう。

引用文献

- Dietz, N. A., & Martin, P. Y. (2007). Women who are stalked: Questioning the fear standard. *Violence Against Women, 13*, 750-776.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連パーソナリティ研究, *17*, 82-94.
- Johnson, M. C., & Kercher, G. A. (2009). Identifying predictors of negative psychological reactions to stalking victimization. *Journal of Interpersonal Violence, 24*, 866-882.
- Kamphuis, J. H., Emmelkamp, P. M. G., & de Vries, V. (2003). Moderated validity of clinical informant assessment: Use in depression and personality. *Clinical Psychology and Psychotherapy, 10*, 102-107.
- 警視庁 (2020). ストーカー事案の概況 警視庁 Retrieved from https://www.keishicho.metro.tokyo.jp/about_mpd/jokyo_tokei/kakushu/stalker.html (2020年10月15日)
- 小林大介 (2018). 日本におけるストーキング被害者の心理社会的状況に関する研究動向と課題 東北大学大学院教育学研究科研究年報, *67*, 267-285.
- 小林大介 (2020). 日本語版改訂被害者用迷惑な接近行動尺度 (UPBI-R-V-J) の開発 心理学研究, *91*, 44-53.
- Langhinrichsen-Rohling, J., Palarea, R. E., Cohen, J., & Rohling, M. L. (2000). Breaking up is hard to do: Unwanted pursuit behavior following the dissolution of a romantic relationship. *Violence and Victims, 15*, 73-90.
- Logan, T. K. (2020). Examining Stalking Experiences and Outcomes for Men and Women Stalked by (Ex) partners and Non-partners. *Journal of Family Violence, 35*, 729-739.
- 大淵憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果— 心理学研究, *68*, 155 - 162.
- Ohbuchi, K. & Tedeschi, J.T. (1997). Multiple Goals and Tactical Behaviors in Social Conflicts. *Journal of Applied Social Psychology, 27*, 2177-2199.
- 大迫弘江・高橋 超 (1994). 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究, *34*, 44-57.

Reyns, B. W., & Englebrecht, C. M. (2013). The Fear Factor: Exploring Predictors of Fear Among Stalking Victims Throughout the Stalking Encounter. *Crime and Delinquency*, *59*, 788–808.

斎藤 勇 (1985). 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, *56*, 222-228.

Sheridan, L., & Roberts, K. (2011). Key questions to consider in stalking cases. *Behavioral Sciences and the Law*, *29*, 255–270.

城間益里・松井 豊・島田貴仁 (2017). ストーカーに関する研究動向と課題 筑波大学心理学研究, *54*, 39-50.

Spitzberg, B. H., & Veksler, A. E. (2007). The personality of pursuit: Personality attributions of unwanted pursuers and stalkers. *Violence and Victims*, *22*, 275–289.

Thompson, C. M., & Dennison, S. M. (2008). Defining relational stalking in research: Understanding sample composition in relation to repetition and duration of harassment. *Psychiatry, Psychology and Law*, *15*, 482-499.

内田照久 (2002). 音声の発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究, *73*, 131-139.